

鬼神童女遊侠伝／鼬ヶ原の対決

作・民富田智明

明治学院大学愛好会人形劇団ZOO
夏期脚本合宿提出作品(2010年)

登場人物

花吹雪のお凜……………義侠心に溢れた無宿渡世の美しき鬼童子。
遠吠えの牙吉……………お凜のお供をしている自称狼の柴犬。

旋風の佐太郎……………鼬ヶ原をねぐらにし、村娘を手込めしてまわる大鼬。

百姓の娘お結……………村の長者の跡取り息子との嫁入りを控えている少女。
お結の兄助作……………貧乏百姓だが、妹の名家への嫁入り話をまとめた。

第一場 とある河原

百姓の娘お結が一生懸命に洗濯をしている。

お結「……………ゴシ、ゴシ、ゴシ、ゴシと。ああ、いい天気。今日は絶好の洗濯日和ね。助作兄いのお世話ができるのももうすぐ終わり。最後まで頑張らなくっちゃ！……………ゴシ、ゴシ、ゴシ、ゴシ」

どこからともなく、旋風の佐太郎の声。

佐太郎の声「こいつあ、ご機嫌じゃねえか！」

お結、驚いて辺りを見回す。

お結「だ、誰？」

佐太郎「ヒヤッハーツ！」

お結の目の前に佐太郎が飛び込んでくる。

お結「きゃあー！」

佐太郎「こりゃあ、めんこい娘だぜ！ こんな上玉あ、見たことねえ！」

佐太郎がいきなりお結に掴みかかる。

佐太郎「おめえ、今すぐ俺のもんになれ！」

お結「い、いやあ！ 放して！」

佐太郎「ええい！ 大人しくしろい！」

佐太郎、暴れるお結を張り倒す。

お結「ああっ！」

佐太郎「生意気な娘だ！ この俺の女になれるのは光栄なことだ。喜ばなくちやいけねえ！」

お結「だ、誰か！ 誰かあー！」

佐太郎「ハッハッハッ！ 叫んだって誰も来ねえよ！ 諦めな！」

お結「いや！ 来るな、けだもの！」

佐太郎「嫌よ嫌よも好きのうちって言うじゃねえか！ 頭が真っ白になるくらいにヒイヒイ言わしてやるぜ！」

佐太郎、お結に迫る。

お結「いや、いやあああ！」

その時、

牙吉の声「うおおお！」

いきなり現れた遠吠えの牙吉が佐太郎に飛び掛り、思い切り噛み付く。

佐太郎「ぎゃあ！」

噛まれた勢いで吹っ飛ぶ佐太郎。だが、倒れずに踏ん張る。

佐太郎「い、痛え！ 何しやがる！ 放せこいつ！」

噛み付いた牙吉を、力任せにぶん投げる佐太郎。

牙吉「うわっ！」

牙吉は咄嗟に空中で体をひねり、お結の近くに着地する。

牙吉「大丈夫かい？ 嬢ちゃん！」

お結「わ、ワンコ？」

牙吉「おいらあ狼だ！ ワンコじゃねえ！」

佐太郎「ええい、この腐れ犬め！ 俺の恋路を邪魔しやがって！ 犬鍋にして食ってやるぜ！」

お凜の声「何が恋路じゃ！ ただの手込めじゃろう、卑怯者め！」

佐太郎、周囲を見渡す。

佐太郎「次から次へと！ 誰でい！ 出てきやがれ！」

お凜の声「ええじゃろう！ たあつ！」

三度笠に道中合羽という旅姿をした花吹雪のお凜が、颯爽と佐太郎の前に飛び込み、立ちはだかる。

お凜「お天道様の下でうら若き乙女を弄ぶなど外道の極みじゃ！ きさ

ん、それでも妖か！ 恥を知らんかい、恥を！」

佐太郎「うるせえ！ おう、鬼童子、てめえ何もんだ！」

お凜「正義の味方に決まっとうろうが！」

佐太郎「ふん、笑わせるぜ！ てめえみてえなちつこい奴が粹がんじゃねえや！」

佐太郎、得物の二丁鎌を手に取り、構える。

佐太郎「俺あ鮎ヶ原をねぐらにしてる旋風のお凜だ。俺に刃向かう奴あ、女でも容赦しねえぜ！」

お凜、腰に差した愛刀「閃迅丸」を抜き放つ。

お凜「上等じゃ！ 秩父鬼姫山の花吹雪のお凜だ、わしのことよ！ 覚悟せいー！」

しばし睨み合うお凜と佐太郎。

佐太郎「八つ裂きにしてくれるわ！」

佐太郎が切りかかってくる。それをお凜はうまくかわし続け、隙を狙って斬り込む。

お凜「でやあつー！」

佐太郎「うぐわあつー！」

斬られた勢いで吹っ飛び、転げまわる佐太郎。

佐太郎「手がつ、手がつ、手があつー！」

お凜「二度と悪事を働かんことを誓え！ そうすれば命までは取らん！」

佐太郎、起き上がり、

佐太郎「はあつ、はあつ……。花吹雪のお凜と言ったな？ この落とし前は必ずつけるぜー！」

佐太郎、一目散に逃げていく。それを見届けて、お凜は刀を納め、お結のもとに駆け寄り、手を差し伸べる。

お凜「危ないところじゃったのう。大事ないか？」

お結「……うん。ありがとう」

お結、立ち上がる。

お凜「お凜って呼んどくれ。おぬしは？」

お結「……お結」

名乗ると、お結がいきなりお凜に抱きついて泣き始める。

お凜「ちよ、ちよつと！ お結ちゃん！」

牙吉「ま、無理もねえな……」

第二場 百姓家・屋内

狭くて汚い小さな家の中に、お凜とお結に、加えてお結の兄助作が、囲炉裏を囲んで座りこみ、鍋をつついてる。その後ろの土間の辺りに、どんぶりにかぶりつく牙吉がいる。

助作「危ないところ、悪い妖から妹を助けて下すつて、本当にありがとうございやす。この助作、ご恩は一生忘れやせんぜ。うちはこの通りの貧乏百姓だから、大したお礼もできねえが……」

お凜「困つとるもんを手助けするのが鬼子の筋道じゃ！ 助作さん、気にせんで下さいな」

助作「まあ、せめて、しばらくゆつくりしていつて下せえ。あつしは、急にうちん中が賑やかになつてうれしんですよ。な、お願えしやすよ」

お凜「そうじゃのう。どうせ、気ままな流れ旅じゃけえ、お言葉に甘えて草鞋を脱がしてもらうことにします」

助作「どうも、ありがとうございやす」

お結「兄い、なんか鼻の下伸びてない？ まさか、お凜ちゃんをそのまま留めて、お嫁さんにしようなんて考えてたりしないわよね？」

助作「ば、馬鹿野郎！ そんなんじゃねえ！」

お結「慌てるのがすごく怪しい。だつて、お凜ちゃんすごくかわいいもんねえ」
お凜「か、かわいいなんて、お結ちゃん、恥ずかしいわい……」

牙吉「おう、兄さんよ、おいらの姉さんに手え出しやがったら、この遠吠えの牙吉がただじゃおかねえぞ！」

助作「だから、そんなんじゃねえつて……」

一同、大笑い。

お結「でも、久しぶりに賑やかになつて本当にうれしな。こうして助作兄いと一緒にいれるのもあとちよつとの間だし」

お凜「え？ そりゃあ、どういふことなんか？」

お結「私、お嫁に行くの」

お凜「お嫁！」

助作「いやね、お結はこの器量よしだろ？ おまけに炊事洗濯も得意ときた

もんだ。これで放つておく男はいねえ。そんで、村の長者の跡取り息子が、お結を嫁にくれつて熱心に言い寄つてくるもんだから、うれしくなつちまつて、お受けしたんですよ」

お凜「へえ、お嫁さんかあ、ええのう。お結ちゃん、おめでとうー」

お結「ありがとう。でも、私がお嫁に行つたら、兄いはまだ独り身だから心配で……」

助作「なに、気にすんなつて。俺は死んだおつかさんとおとつあんに、おめえの嫁入りの面倒を見るつて約束してんだ。俺は一生貧乏でもいい。けんど、おめえだけには、綺麗な着物が着れるようない暮らしをさせてやりてえんだよう」

お結「兄い……わたし、立派なお嫁さんになります！」
助作「おう、俺が見込んだ婿殿だ。しつかり嫁つ子の務めを果たすんだぜ！」
お結「はい！」
お凜「助作さん、まつこと、ええお兄さんじゃのう！ こんなお兄さんがいて、お結ちゃんも幸せもんじゃないや！」
助作「へへ、恐れ入りやす」

（二）で、牙吉が会話に割って入る。

牙吉「ところでよ、昼間のイタチ野郎は必ず仕返しに来るはずだぜ！ 手首を叩き斬ったところで懲りるような生温い奴にやあ見えねえ！」

お凜「……うむ。確か、鼯ヶ原の旋風の佐太郎とか言っておったのう」

牙吉「姉さんも嬢ちゃんも、奴に匂いがばれちまつてる。この家を嗅ぎつけて、闇に紛れて夜討ちを仕掛けてくるかもしれないねえぜ！」

助作「よ、夜討ち！」

お凜「大丈夫じゃ！ こんなわしの目が黒いうちは、悪もんに手出しはさせんからのう！」

お結「お凜ちゃん……」

お凜「牙吉、今夜は外で寝ずの番をするんじゃないや！ 一歩たりとも、奴を家に近づけるんじゃないで！」

牙吉「よっしゃ！ 任せとけ！」

お凜「匂いを嗅ぎつけられるんじゃないやあ、逃げたつてどっち道襲いかかってくるちゆうことじゃ。ならば、迎え撃つ以外に道はないで！」

第三場 百姓家・野外

非常に簡素な造りの家の前に篝火が焚かれており、牙吉がうろうろしている。
ふと、満月が浮かぶ星空を見上げる。

牙吉「ああ、良い夜だぜ。月も星もおいらに味方してくれてらあ！ これなら、寝ずの番も辛くはねえや！ ん？」

牙吉が鼻を利かせ、周囲の臭いを探り始める。

牙吉「イタチ臭え！ 野郎、早速来たな！ おい、出てきやがれ！」

佐太郎「でりやあつ！」

いきなり佐太郎が飛び込んできて、牙吉に切りかかる。

牙吉「うおつ！」

咄嗟に後ろに飛び退く牙吉。

牙吉「鋼鉄の鉤爪か。面白えもんねじ込んでるじゃねえか！ ちよん切れた手によ！」

佐太郎「おい、犬ころろ！ 死にたくなけりやあ、その辺で縮こまってな！」
牙吉「やかましい！ 男牙吉、てめえをここから一步も通す訳にやいかねえん
だい！」
佐太郎「なら、鍋の具になるつきやねえぜ！」

牙吉と佐太郎の立ち回り！
果敢に佐太郎に噛み付いていく牙吉だが、鎌と鉤爪の威力に押され、倒
される。

牙吉「うぐつ……。こんなもんで、やられてたまるかってんだ！」

牙吉が立ち上がろうとするが、そこに、佐太郎の一撃。

牙吉「ぐあつ！」

佐太郎「威勢だけは良いが、口ほどにもねえな！ 不意打ちくらった昼間と
は訳が違うんでい！」

牙吉「姉さん……済まねえ……」

お凜の声「どうやら、牙吉は破れたみたいじゃのう！」

佐太郎「出たな、鬼童子！」

お凜「とうつ！」

お凜が佐太郎の前に飛び込んで対峙する。

佐太郎「花吹雪のお凜！ 昼間の札に来たぜ！」

お凜「わしの子分をコテンパンにしおって……。この代償は高くつくで！」

佐太郎「ふん！ てめえに斬られた手の落とし前はこんなもんじゃないや終わらね
え！」

お凜「つべこべ言わんと、かかつてこんかい！」

佐太郎「よし！ 目に物見せてくれる！ くらえ！ 大旋風！」

突如、佐太郎の手から旋風が発生し、お凜を巻き上げてどこかに吹っ飛
ばしてしまう。

お凜「うわあああああつ！ なんじゃこりやあああつ！」

牙吉「ね、姉さん！」

佐太郎「ハアーツハツハツハツ！ 馬鹿め！ 奥の手は隠しておくもんなの

さ！ 旋風の佐太郎の通り名は伊達じゃねえぜ！」

牙吉「イタチ野郎、汚えぞ！」

佐太郎、倒れている牙吉を踏みつける。

牙吉「ぐお！」

佐太郎「汚くて結構！ 邪魔者はいなくなってもらうのが一番よ！ 俺あよ、
娘さえ手に入ればそれでいいのさ！ ハツハツハツ！」

お結の前に盾になるようにして、斧を持った助作が立っている。

助作「外が……静かになっちゃった……」

お結「兄い、お凜ちゃんは？ まさか、やられちゃったんじゃない……」

助作「馬鹿言うねえ！ あの鬼童子だけが頼みの綱なんだからよ、もしそんなことがあったりしてみろ。俺たちの助かる見込みはねえ！」

お結「嫌、嫌だよそんなの！」

佐太郎の声「残念だが、頼みの綱は切れちゃったぜ！」

佐太郎が飛び込んでくる。

お結「いやああっ！」

助作「こ、こいつ！ 鬼童子はどうした！」

佐太郎「俺の大旋風でよ、どっかにぶっ飛びしまったぜ！ ハッハッハッハッ！」

お結「そんな！」

佐太郎「連れの犬つころもよ、外でおねんね中だい！」

お結と助作に、佐太郎が迫っていく。

佐太郎「おい、どん百姓！ 大人しく娘つ子を渡しな！」

助作「てめえのような化けもんに、お結を渡してたまるか！」

佐太郎「そりゃあねえぜ。鬼童子とは仲良くしといてよ、俺は化け物扱いするのによ。理不尽じゃねえか」

助作「うるせえ！ これでもくらえ！」

助作が佐太郎めがけて斧を振り下ろす。

それを佐太郎は軽くかわし、助作が勢いあまって倒れこむ。

佐太郎「そんなへつり腰じゃ、当たらねえぜ！」

佐太郎が助作に鎌を振り下ろす。

助作「ぐわああっ！」

お結「あ、兄い！」

佐太郎「おい、小娘！ こいつはなあ、おめえが初めから素直にしていればよ、こっちはならなかったんだぜ！」

佐太郎が助作を執拗に掻き切る。

助作「うぐああああっ！」

お結「いやああああっ！ やめて！ やめてえっ！」

お結が無我夢中で助作のもとに飛び込む。

お結「兄いつ、兄いつ！」

助作「ぐふっ！ハアッ、ハアッ、お結、済まねえ……。俺、おめえを守ってやれなかった……。兄ちゃん失格だな……。どうせくたばるなら、おめえの花嫁姿を拜んでからに、したかった……。ぜ……ぜ……」

助作にとどめの一撃を加える佐太郎。

助作「うっ！」

お結「兄いいいっ！」

佐太郎「おい、どん百姓！この娘は俺のものになるんだぜ。願いが叶ったようなもんじゃねえか！」

佐太郎がお結を強引に担ぎ上げる。

お結「いやっ、放して！」

佐太郎「この娘は、旋風の佐太郎がもらっていくぜ！ハッハッハッハッ！」

佐太郎、お結を担いだまま飛んで出て行く。

佐太郎が去った後、よろけながら、牙吉が入ってくる。

牙吉「くそっ！間に合わなかったか！」

遅れて、お凜が駆け込んでくる。

お凜「なんてことじゃ……」

牙吉「姉さん、無事だったかい！」

お凜「わしは平気じゃ……。吹っ飛ばされただけじゃけえ……。けど！」

お凜と牙吉、助作の亡骸の前まで行く。

お凜「助作さん、済まんもう、済まんもう……。わしが不覚を取らんかったら、こんなことにはあつ！」

牙吉「いや、おいらがいけねえんだ！寝ずの番を任されたのに、おいらがぶっ倒れちまったからいけねえんだ！」

お凜「……牙吉い、このまま黙って引き下がるわけにはいかんで！助作さんの無念を晴らすためにも、佐太郎を叩き斬って、お結ちゃんを助け出すんじゃ！」

牙吉「よし、おいらあやるぜ！あの野郎を、イタチ鍋にして食ってやる！」
お凜「奴は鮠ヶ原のねぐらに向かったはずじゃ！追いかけるで！」

牙吉「あの薄汚え臭いはよ、忘れたくても忘れられねえ！姉さん、こつちだ！……いっ！」

牙吉がよろよろしながら歩き出す。

お凜「お結ちゃん、こんわしが、必ず！」

BGM・ON 梶芽衣子「怨み節」

お凜が後を追う。

第五場 とある小道

お凜と牙吉の道行き。

第六場 鼬ヶ原

朽木が数本立ち、枯れすすきが覆い茂るただっ広い原野が、月明かりに照らされている。

BGM・OFF

木にくくりつけられる形で、お結が拘束されている。

お結の前に立っている佐太郎。

佐太郎「……いつまでそうやってるつもりだい。俺はなあ、ほんとは手荒な真似をしたくねえんだ。さつさと観念して俺のもんになれば、辛い思いをする」とはねえんだぜ？」

お結「誰がお前なんかと！ 人殺し！」

佐太郎「……まだしつけが必要なようだな」

佐太郎、お結を打つ。

お結「ああっ！」

佐太郎「おい、これ以上痛い思いしたくないだろ？ え、どうなんだよ？」

お結「……今に、天罰が下るわよ！」

佐太郎「天罰？ ハッハッハッハッ！ 上等でい！ 下せるもんなら下してみろってんだ！ 今までどんだけの娘を手込めしてきたか、自分でもわからねえ。どいつもこいつもよ、俺に逆らいやがった奴あ、切り刻んで野晒しにしてやったぜ！ 天罰が怖くて手込めなんかできるかってんだ！」

佐太郎が繰り返しお結を打つ。

お結の悲痛な叫びが響く。

お凜の声「やめろ！」

佐太郎「……この声は！」

佐太郎の前に、お凜と牙吉が飛び込んでくる。

お凜「佐太郎、わしはきさんを絶対に許さんぞ！」

牙吉「てめえを地獄に叩き落しにきたぜ！」

佐太郎「ちっ、しつこい奴らだ！ たかが村娘一人に、流れもん風情が、どうしてそこまで躍起になりやがる！」

お凜「お結ちゃんは、わしの大事な友達じゃ！ 見過ごせるわけがなからう

が！」

お結「……お凜ちゃん」

佐太郎「友達？ 笑わせるぜ。昨日、今日、明日と同じ場所にいることのない奴が、何を抜かしやがる。てめえにとつて、所詮は他人じゃねえか！」

お凜「違う！ それがたとえ一度限りの間柄じゃったとしても、互いに心が通うた時点で友達なんじゃ！」

佐太郎「へっ、青臭え理屈だぜ！」

お凜と佐太郎が対峙し、しばしの間。

お凜「牙吉、お前は手負いじゃけえ、手え出すな！」

牙吉「姉さん、おいらもやるぜ！」

お凜「……お結ちゃんを、頼む！」

牙吉「……ああ、任せとけ！」

牙吉、お凜から離れる。

佐太郎「この鮠ヶ原から生きて出られるとでも思ってたのか？」

お凜「そんなことは、わしにやあどうでもええ。わかっとるんは、この『閃迅丸』が、きさんの首を求めとることだけじゃけえ！」

お凜、刀を抜き放つ。

佐太郎「……心の蔵、引きずり出してくれる！」

佐太郎、鎌と鉤爪を構える。

佐太郎「くらえ！ 大旋風！」

佐太郎の手から旋風が放たれる。

お凜はそれを跳んで避ける。

お凜「同じ手に乗るか！」

そのまま空中からお凜が佐太郎に斬りかかり、斬るか斬られるかの立ち回り！

傍らで、牙吉がお結の拘束を解き、解放する。

佐太郎の猛攻の中、お凜は一瞬の隙を突いて、佐太郎に渾身の一太刀を浴びせる。

お凜「必殺、花吹雪！」

佐太郎「うぐっ！」

背中合わせで動きが止まる両者。

お凜「真っ赤な血の花咲かしてやるで！」

直後。

佐太郎「ん？ 体に……裂け目がっ！ ぐあああああああつ！」
お凜「鬼神童女、花吹雪のお凜、参上！」

佐太郎、崩れるように倒れる。そして、何故か爆発する。
血振りして納刀するお凜。

牙吉「姉さん！」

お凜のもとに、お結を連れた牙吉が駆けつける。

お凜「お結ちゃん！ ぐめんね！」

お結「お凜ちゃん！」

お結が、お凜の胸に飛びつき、泣きじゃくる。

お結「兄いがっ、兄いがっ、うわあああつ！」

第七場 墓前

川の見えるところに簡素な墓。

墓前に花を供えるお結。お凜と牙吉が一緒に立っている。

お結「助作兄いはこの川が大好きだったから、ここなら、喜んでくれるかな？」

お凜「うん、きつと喜んでくれるはずじゃ」

お結「お凜ちゃん」

お凜「ん？」

お結「私、兄いがまとめてくれた嫁入りを、立派に果たしてみせるわ」

お凜「お結ちゃんなら、きつと素敵なお嫁さんになれるで！」

お結「花嫁姿、お凜ちゃんに見てもらいたいな」

お凜「いや、わしゃあ、単なる流れもんじゃけえ。それに、ハレの場に鬼子のお

しがいたら、縁起が悪うて先方に嫌がられるのう……」

お結「……行つちやうのね？」

お凜「……うん」

お結、お凜の手を取る。

お結「私たち、友達だよね！」

お凜「……友達じゃ！ ずっとずっと、友達じゃ！」

牙吉、ボソツと。

牙吉「姉さん、そろそろ行かなきゃ」
お凜「うん」

お凜、お結に背を向ける。

お凜「みらびじゃー」

お凜と牙吉、颯爽と歩き去っていく。

劇終